

研究

佐伯と 国水田 独歩 (六)

坂本卯直と

会夏 山本 保

1. 富永旅館

明治二十六年九月三十日 汽船で佐伯入りした独歩兄弟は、大手前の富永旅館(現在大手五橋本酒店)に投宿しました。

当時富永旅人宿と呼んでいたそうです。その旅館に滞在中の独歩と、山名驥氏、野村一也氏、高橋庸吉氏らが訪問しています。

2. 月本旅館

富永旅館に滞在すること僅かに四日間、十月四日、芳島月本旅館(月本小策経営、当時佐伯町一流の旅館、現在の太平五神明社並に佐伯商工会館)に移りました。

鶴谷学館生徒富永徳磨(当時佐伯町藤分教場教師)の妹トミさんの思い出話を左に紹介します。

兄達から、今度鶴谷学館に若い先生がや出てにやつと聞かされて聞かない頃、船頭所から芳島(今年区)へ渡る万年橋を通って、私ッ家のある芳島側へ歩いてくる。見慣れぬ二人連れの青年(独歩兄弟)を見かけました。

この人達は鉄色の無地の羽織を着た(当時佐伯の人は大分袴物を着ていた)一見商人らしい感じの人でしたが、橋を渡り魚市場(現在今年区にある青

果市場)の方へ行かれました。

それから私が家の門口で、羨のいたずらをするのを見てみると、先刻見かけた二人の青年が、また私の家の前を通って行くのでした。私はその時、また弟と一緒は門口に立ったまま、もの珍らしげに眺めたものでした。

(註) 彼年(明治三十年頃)富永トミさんは、独歩から求婚されましたが、お嫁の反対にあり、その婚約は不調に終わりました。

その富永トミさんは一昨年、佐伯老人ホーム(養老院)で、寂しくその生涯を閉じました。

独歩兄弟が月本旅館に移って十日ほど経った頃に、大兩大洪水に見舞われ、月本旅館のある芳島と鶴谷学館のある内所との間を流れる内所川(現在は幹線道路になってます)の水も氾濫して、月本旅館の前にかかっていた諸木橋も、次第に洪水の危険にさらされてきました。

橋が落ちると、芳島と所との交通が遮断されてしまい、独歩は鶴谷学館へ通勤ができなくなり、このことを心配した月本小策夫人(セイ子さん)は大声で「東京の先生を早く又店(内所)にあった月本家の又店、兵衛商店(常)の方へ案内して下さい」と店の者に呼びかけたそうです。

下度その時独歩は終熟して寝ていました。弟の收二が、疲れた兄を背中に乗って、濁水の又をぎる諸木橋の上を渡って行き、ました。

この明治二十六年十月十四日の大洪水は、県下未曾有のもので、家屋の倒壊、橋の流失、人馬の死傷がおびただしい数字に上り、池船橋も流されました。独歩は三度お家を転々と移って避難しています。

(註) 独歩が、佐伯港の築港に尽力された月本小策経営の旅館に下宿したことは興味深いことです。

寛政六年(西暦一七九四年、八代毛利高標)関谷儀が諸水

狼侍奉行を拜命して、始めて荷芸場が芳島（万年区）に設けられた。

ハセ苗を育て、盛んに佐伯の山野に移植しました。そしてハセの実から蠟と採取して、年々収益をあげることでござました。

そこで橋と分ける必要が生じ、寛政七年国益橋が誕生しました。佐伯では始めて作られた板橋でした。この橋は諸木植付所の門へ通じました。俗に諸木橋と呼びました。

旧藩時代は敵の侵入を不せぐため、川には架橋されないので慣例でした。

3 坂本 郎

十月十七日独歩は月本旅館から、城山の麓（山手区）坂本永年（鶴谷学館長）宅に転居しました。

「春の鳥」の作品より

私及其頃、也どや住んでしたが、何分不自由で困りますから色々な人に頼んで、遂に田中（坂本永年）という人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

独歩遺文「奇異なる経緯」より

此城（佐伯城）に上下着て侍候せし老人（坂本永年）、山麓に位んで銀行の役員（佐伯百七銀行取締役）たり。

「欺かざるの記」より

明治二十六年十一月二十七日

昨夜、二階を下り坂本老人と語る。

佐伯に一個の老翁あり。奇怪な首を担うて行くをせし

はしば見受けぬ。この老翁の事を向い、多少聞き得たり。この翁の情に堪えず、何れの時か過うて殺しく語

るべし。

十二月二十五日

午前九時過ぎ、坂本氏の寓居と出立、荏港なる茶屋に憩いて、上り汽船を待つ。待つ久しく船来らず、待ち切れず独り散歩を試む。

汽船来り衆船。正午と覺し頃漸く出港す。（父母の居る山崎柳井町（帯者））

明治二十七年 三月二十九日

佐伯坂本方に帰るを得たり。

佐伯に帰りて驚きたるは桜花満開せる事なり。夫の徳を吐ける事なり。思ふに因許（柳井町）より汽船半々月も早し。

七月二十七日

曾暮坂本氏にて馳走せらる。夜日置、刺谷、高橋の三氏吾がために送別の宴を尙かる。

夜やや更けて俤に乗り帰宅。市街より荏港に至る間里程殆んど一里。四方まことに寂然、俤上暇想して人生の流転を思ひ、老翁の事など思いつく。

独歩兄弟は未佐初めの一か月余り（高永旅館、月本旅館に滞在）と、佐伯離任前の一か月（鶴谷の鶴田旅館滞在）と除いた八か月余りを坂本郎で過ごしました。

坂本郎は、旧藩時代の上役の家板で、静かな城山の麓にありました。前後に庭園をかまえた雅致に富む武家屋敷で、思索と散歩好きな独歩にとって、最適を環境でした。

現在も、ほとんど昔の面影そのままに残っています。

岩崎元ヨさん（坂本水亭三女、当時十七八才）は、当時のこ
とと次のように語りました。

「先生（秋彦）が私方へ移る前日芳島（水亭三）の月本旅
館に居ました。それは僅かの回数であつたと思いま
す。

坂本でお世話するようになったのは、何でも矢野文
雄（龍溪）先生から御依頼があつたからだと聞いたよう
な気がしますが、國水田先生の前任の久代孝次郎先生
も以前私方に居られた關係もあつたのでしよう。

先生御兄弟はどちらも二階に住まわれ、先生の部屋
は、見晴らしのきく八畳の前部屋（陽の間）、收二さん
の日は反対側の城山に面した三畳の裏部屋（陰の間）で、
その二つの寄屋の中間に三畳の物置がありました。

その時の先生の月給が二十五圓で、私方の下宿料は
お二人を合せて八圓でした。
先生は格別牡蛎の好物が好きでして、酸々それ
でござえていました。ある時先生が、ぶ厚い長方形
の皿を二枚持つて帰つて、

「所で目にかかつたので、收二と私のと二個買つて
来ました。一個三錢五厘で、両方で七錢でした」と
言い出されたので、母と私が思わずふき出したこと
があります。

この皿には先生の大好物の牡蛎の酥物を盛つて出し
たものでしたが、後に惜しいことに、收二さんのであ
つた方を割つてしまい、今は先生の方の一枚だけ残
つて居ります。

朝起きると直ぐ二階の窓を全部開放して、朝々清新
な空気を部屋に入れ、そして前方の元越山の方を眺め
るのがきまりのよう。また朝食前に近く、養賢寺や
馬場通りの方を散歩してかえることも度々でした。

散歩と云へば、先生ほど散歩の好きを人も珍らしいか
つたと思ひます。左にいり收二さんをつれて、少して
も暇があれば必ずどこかを歩いて帰りました。
また土曜、日曜日などはかかかず、遠くの野や山へ
向つて出かけることも多かったです。時々日夜中に、城山の
方から来た独りで帰つてこられたこともありました。
（註）の山手五坂本邸には、現在坂本栄さん、坂本ミ
エ子さんが居住されています。

② 田藤時代、毛利侯か女馬に築いた別邸が浜御殿と解
体して養賢したのが、坂本邸で、珍らしい間取りの建
物です。
また二階の隅の隅の入口には、秋月橋門の書になるフ
スマもありました。

③ 明治四年頃の佐伯藩時代屋敷園をみると、山際には、土蔵六右
衛門、秋山庄兵衛、御米倉、山中盛太郎、西名幾作、坂本永
年、古川策馬、岡矢林兒、高瀬朝宗、養賢寺と、上
級武士屋敷が軒を並べていたことがわかります。

④ 散歩が山柳井所より坂本邸へ夏もかん十株を送つてき
ました。現在三株余り残っています。
散歩が湘南退子より送られた柚の木は、現在坂本邸には
ありません。枯れた為には切りたおされたでしょう。

⑤ 坂本邸に住んでいる坂本栄さん（八十一才）は、昨年佐伯市の
文化功労者一人として表彰されました。
散歩に使つた当時の部屋や食器類を大切に保存する一
方、散歩研究のため佐伯を訪れる県内外の人々にも、その
紹介につとめています。

4. 鎌田旅館

「敷かざるの記」より、

明治二十七年 七月一日 日曜日

此日午前、坂本邸を去りて桂（葛）港の浜の宿（鎌田
旅館）に転ず。蒸気開屋なり。

七月二日
炎熱甚だし、人力車にて登校す。

七月三日
今日三回海水に浴す。

七月七日
夕暮舟を海に泛べて漫航す。

七月十日
昨夜新月(みかげぎ)に乗じて舟を満潮に泛べて放流す。南然として天地の無極の壯麗に對す。

七月三十一日
夜、独歩、收ニ、飯沼源治、田中敏一、富永徳麿と共に六人泳ぐ。海中の鱗身と包んで恰も獲の躍るに似たり。

八月一日
佐伯と出發して、二日の午後三時半頃三津ヶ浜(愛媛県)に着し、其夜は故に一泊せり。
薄暮松山(お山)を見物す。出兵(日清戦争)の光景を月撃せり。

七月一日独歩が転居したのは、葛巻の鎌田清作経愛の旅館兼蒸洗問屋の二階の一間でした。
その雨独歩を訪問した坂本真澄氏(当時文分中學校生徒)は、次のように話したそうです。
「天井の低い二階の一間、六畳くらいだつたと思ふ。そこに独歩兄弟が一緒に居た。」

荷物などは殆んどなく、高さが三尺ほどの小本箱の中に、ドイツ語と英語の本、鞍山陽の漢書、その他が書物が六冊と、面白い本ばかりで、私が借りて帰りたいと思ふような小説類は、何一つ見当らなかつた。

鎌田ヨネさん(鎌田旅館主、清作の孫)は、当時の様子と次の様に語っています。

「父定(当時十二才でした)は、独歩に注文されて度々船を出しては、近くの葛巻から妙見鼻(妙見神社下)あたりの海を漕いで廻った。そんな時、独歩は絵をかいたり釣りをしたりした。

また独歩という人は、大変気短かで、氣に入らぬことがあるとすぐ怒り散らした。」

この旅館の採先で、独歩は主人夫婦(清作ヨネ)から、処女作「源叔父」のモデル(波船業高原嘉治郎)についての身の上話を聞いています。その近くに「独歩と妙見社」と標題をかかげたくわしい説明板(佐伯市商工観光製作)が建てられています。

富永旅館、月本旅館、坂本邸、それから鎌田旅館へと下宿を移した独歩は、鶴谷学館教師と選戯して明治三十七年八月一日の昼過ぎ、瀬戸内海通いの汽船に乗って佐伯と別れを上げました。

冬照年表

| 年 | 号 | 西暦 | で | き | こ | と |
|----|---|------|----------------------------|---|---|---|
| 寛政 | 六 | 一七九四 | 開谷磯若本権介奉行となり、八幡苗を作り山崎に移植す。 | | | |
| ク | 七 | 一七九五 | 猪木橋(一名国益橋)採設。 | | | |
| 天保 | 六 | 一八三三 | 魚市場を六本松濱に開く。 | | | |

| | | |
|------|------|--------------------------|
| 天保一〇 | 一八三九 | 内所の所人若島南極、神洲社を造営する。 |
| 文久元 | 一八六一 | 太平橋を架設す。 |
| 明治一三 | 一八八〇 | 坂本水手管務委員となる。 |
| 〇 | 一八八二 | 佐伯市より葛塚に至る道路通す。 |
| 〇 | 一八八三 | 上堅田村岡、各内田善太郎、私款を以て世能架設す。 |
| 〇 | 一八八三 | 日本弥生(小栗の父)葛塚南極。 |
| 〇 | 一八九二 | 日本小栗佐伯港一部理立(家屋建造)爲す。 |
| 〇 | 一八九三 | 大水害、市街家屋過半浸水す。 |
| 大正一二 | 一九二三 | 女島橋架設。 |
| 昭和八 | 一九三三 | 佐伯幹線道路埋文。 |
| 〇 | 一九四二 | 津志河内橋架橋。 |
| 〇 | 一九五一 | 番匠川改修工事国営移管。 |
| 〇 | 一九五六 | 池船橋永久橋となる。 |
| 〇 | 一九六五 | 幹線道路備装完成。 |
| 〇 | 一九七〇 | 坂本宗 佐伯市文化功労者として表彰する。 |

書翰

鶴や城に登りて 長崎市 一瀬フミ子

(御紹介) 去る八月某日、それは焼けつくような日
 ざしの強い午後、突然の電話をうけて上岡の
 十三重塔にかけつけて初対面、ハイナカの御説
 明申し上げ、それから旧御殿の建物と、言われ
 るので船頭所に向案内申した方、小学校の先生、
 生、よくもばるる遠くまでいらしたものだ。
 次に掲げる礼状を頂いたので、小学校の女生で、
 かくもおれらの郷土の城跡を推賞下

下さったこと、城下のものとして感激され
 るものが多いため、特に先生にそうして、はが
 き全文、原文のまま、掲げさせて頂きます。
 (拜察)

前書ごめんください。

去る七月三十日に始めて佐伯市を訪れ、毛利氏の居城
 鶴や城へのほり、西出丸大門より入り、二カ丸跡、本丸、
 北出丸跡をひとり散策して、石置の丘。〇年の跡を偲び、
 古色そう然として今なお昔時を偲ぶ貴重な城郭は、今も
 なお胸おどる思いでいつげいず。

殊に本丸の石置は、他國の石垣にも珍らしい塔おとの
 美しさ、しばし眼をみはる思い、あつと驚きの声を上げ
 るほど素晴らしく、まことに芸術の一品を想おせる石が
 きでした。

一時間余も汗も忘れて石かきの前に立ちすくみ、後友
 び苔むした石垣をなでまわしたことでしよう。こんなには
 手輪を経た、古く美しい城壁を私は始めて見ました。
 (津山の城にも、日出城、掛川城、駿府、浜松、原城など、
 〇よそをみても、この美しさは比べようもありません。
 せよせ他人にはい友すうされぬよう、いつまでも保存
 してくたさいませ。

酷暑の中を、書院の移転場所までおつれくたさう、感
 謝するばかりでございます。

豊後路の城をおるき、この佐伯の城ほどすばらしい石
 垣はごやいませせん。印象はいつまでも胸の奥にやきつい
 ております。

今後共よろしく御指導ください。

(長崎市江里所九の二八)